

編集後記

◇3月29日、いも類振興会の平成21年度第2回評議員会・理事会が開催された。厳しい財政状況の下、提案した平成22年度の事業計画・収支予算書等について承認を得、4月から平成22年度の事業がスタートした。限られた予算の有効活用を心がけたい。

平成22年度からは、新たに「ジャガイモ事典」の編集に取り組み、概ね2年後の刊行を目指す。

◇1月28日、平成21年度かんしょ品質評価研究会を、東京「南青山会館」で開催した。焼きいも、干しいも、ペースト、いもようかん、大学いも、ケンピ・チップ、パウダー、焼酎について、各企業が分担して実施した評価試験結果に基づき検討が行われた。

これらの評価結果なども参考にして、優れたサツマイモの新品種が育成されていく。現時点では、平成22年度におけるサツマイモの新品種候補として2品種挙がっている。

◇3月18日、いも類講演会が、いも類振興会と日本いも類研究会の共催で東京「南青山会館」で開催された。講師と演題は、古賀秀徳氏（カルビー株）の「馬鈴しょの栄養学」と椿等氏（千葉県かとり農協）の「甘藷の産地振興」であった。講演会の後、日本いも類研究会総会と情報交換会があった。

◇本誌103号の特集では、「いも類遺伝資源の収集・保存と利用」をとりあげた。サツマイモ、ジャガイモの新品種育成の基礎となる遺伝資源の収集・保存とその利用状況について、研究者の方々に解説いただいた。いも類においても、遺伝資源の重要性は今後ますます大きくなると推察されるので、その動向に注目していきたい。

また、調査・研究では、樋元淳一氏にエチレン利用の実用化技術として期待されている「加工用バレイショの芽の伸長抑制技術」を、広田知良氏には近年問題となってきた「気候変動と野良イモの問題および対策」について、それぞれ寄稿をお願いした。

◇2010年1月12日の日本経済新聞で、ホワイトハウスに菜園「食事の大切さ、子供に」という記事と写真（昨年10月末、ワシントン市内の小学生と収穫したサツマイモを一輪車で運ぶミシェル米国大統領夫人）が掲載され、目を引いた。

ホワイトハウス南側の広大な芝生庭園の一隅をはがし、ホワイトハウス史上最大の家庭菜園（100㎡）を作り上げたのはミシェル大統領夫人。米国民、特に子供たちへの食育が狙いだ、と書かれている。ホワイトハウスで「サツマイモ」が栽培され、食育に貢献している記事に接し、変化する時代の流れを感じた。

（狩谷 昭男）

いも類振興情報 第103号

平成22年4月15日発行

発行 財団法人 いも類振興会

〒107-0052 東京都港区赤坂6-10-41 ヴィップ赤坂303

TEL 03-3588-1040 FAX 03-3588-1225

E-mail: imoshin@fancy.ocn.ne.jp

振替 00130-1-110152

印刷 株式会社丸井工文社